

安楽寺寺報

開光

第91号 降誕会号 2019/5/21

発行所 〒737-0054 呉市上山田町2-28 安楽寺 TEL.0823-21-7561

ありがたいお経

信楽晃仁

皆さんはお葬式や、法事でお経をあげて「ありがたい」と思われますか？もし思われるのなら、なぜ「ありがたい」と思うのでしょうか。思わないなら、何のためにお経を読んでいるのでしょうか。



先般朝日新聞「声」の欄に、「どう思いますか」という特集がありました。それはある投稿記事に、たくさんの方から、意見が届いたそうです。それを掲載したものでした。

事の発端となった最初の投稿は、義兄の一周忌のため、寺で法事を勤めた方からでした。寺での法事は厳

意見①「自分の葬儀にはお坊さん不要」 親の葬儀で、お坊さんは長々と訳のわからないお経を読むし、葬

粛な雰囲気の中で勤められとても良かったが、ひとつ不満が残ったと言われます。それは読経で「仏様や故人に何を語り、何を願ったのか。説明もなかった」だから「読経前に内容の趣旨説明か、又はお経を現代語に翻訳する装置を開発」して欲しい。というものでした。

意見②「分からないからありがたい」

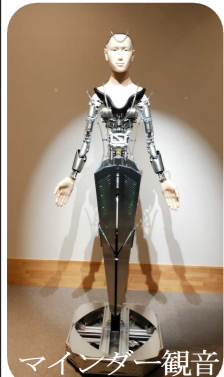
両親が死去し、節目節目の法要、またお通夜から葬儀、その後お坊さんが毎週参ってくれる。その仏事が全て口語のお経だったら、嫌になるだろう。お経は独特の節回し、リズムあってこそ、その時間を静かに過ごすことができる。分からないからありがたいのだと、馬鹿を重ねての実感だ。

意見③「分からないのがお経に違和感」

私は寺に生まれ、結婚するまで父である住職のお経をずっと聞いて育ったが、父がそのお経の意味を説明することはなかった。しかしこの翻訳装置の開発には大賛成。なぜ今まで誰も思いつかなかったのかと思う。「訳のわからないのがお経」というのが世間の通説だが、お経から学ぶべき事がたくさんあると思う。

意見④「お経を翻訳すべきは僧侶」

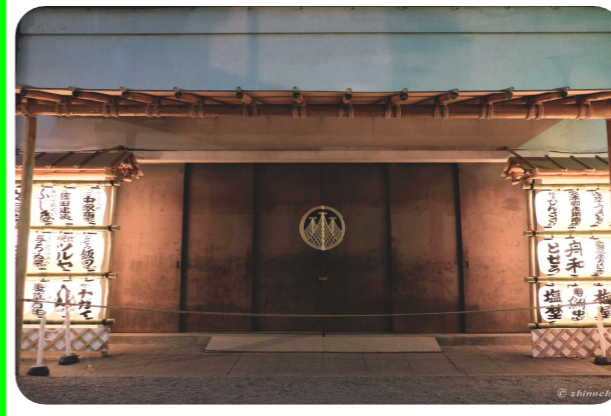
法要において参詣者が僧侶に質問するような場面は乏しく、



マインダー観音 坊さんと対話し、仏教に触れていくことが大切だ。」

「日本人の信仰心」

信楽慧



この写真は浅草寺の夜の写真です。何か神秘的な雰囲気、空気がキリッとしているような雰囲気を感じないでしょうか。

日本人は無宗教だといわれてきましたが、初詣や神社仏閣へはお参りをし、何か一つの宗教を信仰するということではなくても、信仰心らしきものを皆もってきました。伝統的に何か宗教的なものを、その空気の中から感じとってきたように思います。

そもそも宗教とは何のためにあるのでしょうか？ ある宗教の本をみると「未来に対する不安を解消するため」とありました。言ってみれば「未知、無知による不安を解消するために」に人々は宗教を信仰してきたのではないかと思います。

私はそれが今「分からないこと、知らないことによる危険度の低下」、「分からないこと、知らないことの減少」ということがあると思います。

「分からないこと、知らないことによる危険度の低下」とは、昔は病気や災害など原因を知らないことによる生命の危険が今よりずっと高く、その恐怖がとても大きかったのではないかと思います。原因が分からない苦しみは、神や悪霊の仕業と考え、宗教に解決を求めるしかなかったのだと思います。

しかしそれが現代には「分からないこと、知らないことが減少」してきました。科学の発展やインターネットの普及により分からないこと、知らないことが減少し、宗教に目を向ける機会が減ってきたように思います。

昔と今では私たちの生活が全く変わってしまい、昔ながらの方法だけに頼ってはいけないうえ宗教に興味を持たないのではないかと思います。

しかし、科学やインターネットがどれだけ発展し、たくさんの事を知ることができるようになって「死んだらどうなるのか？」など、人間の知恵では解明することのできない、問題があります。

やはり人間の不安に答えていく宗教は、いつの時代でも必要であることを思い、後は現代人にどうアプローチしていくか考えていきたいと思っています。

安楽寺マンガ通信

その4 | 信楽めぐみ作



改元おめでとうございます。平成から令和に変わり、何力変化はありましたか？？ 私は初めて時代が変わる瞬間に立ち会いましたが、何も変化を感じていませんでした。



そんなことを思っていた時、昔人さん×イブル超合金の、カブレーサーさんが「僕は、令和に変わった実感がなかったんですけど、この『実感が無い』というのが上皇と上皇后のこれからの努力の賜物なんだなと思っちゃった。」と、おっしゃっていました。



私はこのように所に目を向ける事のできる人がいることに感動しました。 私達の生活は誰かの努力によって支えられています。当たり前のように生活が出来ていることに当然だと勘違いしないように、少くとも日々感謝を忘れず今和の時代についていきたいと思います。

と述べています。このような記事の内容でしたが、皆さんはどう思われますか。

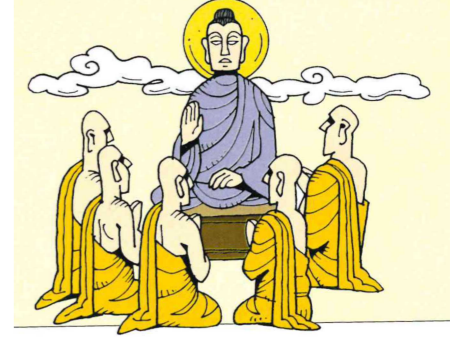
①の方はご自身の葬儀体験から、仏教、お経、僧侶への嫌悪感をあらわにしておられます。「坊主憎けりや袈裟まで憎い」ということなのでしょう。一つの葬儀が仏教、お経、僧侶への不信感として残るとしたら、それは残念なことです。高台寺の執事長が言うように、普段から仏教に触れ、お坊さんと付き合い合っておくことで、そのような法外な請求からは逃れられます。安楽寺でも様々な情報をもっています。是非相談して下さい。そしてこの方の一番の問題は葬儀を何で勤めるのかを知らない。そしてその一番要のお経の意味、読経の意味を知らないという事につきると思います。

この四つの意見それぞれ現場の率直な意見で色々と考えさせられます。そこでまずはお経とは何なのかということですね。訳のわからないこと呪文のように思っている人も多いようです。分からないから効きそうと思っている人もいます。その経文の中に摩訶不思議なパワーが宿っており、その経文を唱えることで、目

の前の現象を好転できる、厄災を逃れることができる、と考えるのでしよう。それを「ありがたいお経」と表現した場面もあるように思います。これは古くて新しい問題です。現代においても多数派ではないでしょうか。

しかしお経は元々お釈迦様の言葉です。お釈迦様は人間がまことの人間として生き、ついに仏になるにはどうすれば良いかを説かれました。それを文字にしたものがお経です。お釈迦様は在世当時から祈禱、呪術等による道理に合わない摩訶不思議な教えを否定していかれました。お経自体に何か特別な力が宿るわけではありません。前任職が生前中、ことある毎に「お念仏の教えは力の宗教ではない、道の宗教だ」と申しておりました。(信楽峻磨遺稿法語集「真宗念仏の教え」P83参照) 何度聞いてもどこかで宗教を力として受け取り、私の為のお経を死者の為のお経と勘違いしている人の多いことですね。

ただお経は、お釈迦様のインド語のご説法を中国の三蔵法師が中国語



に訳しました。それがそのまま日本に入ってきたので、中国語のまま読んでいます。だから訳がわかりません。漢字の中の深遠なる意味を伝える為、翻訳せず漢字のまま勤めるようになったのです。

しかしやはり意味が分からなくては、どこかで日本語に変換しなくてはなりません。その作業がお聴聞です。みんなお経を読んだだけではその中身は分かっています。それが分かっていながら、お経だけ読んで、「はいおしまい」では「わからないけどありがたい」という不思議な功德を期待しているのかもしれない。それでは折角のお経の意味も、法要の意味も見失われてしまいます。折角私の人生の向かうべき道を教えて下さる、本当の意味で「ありがたいお経」を無駄にしてしまうのです。お経、そして読経、そして法事も葬儀も、決して亡くなった者の為ではなく、生きていく私へのお釈迦様の教えです。

最後に、先般京都に行きました時、高台寺に立ち寄りしました。アンドロイドが法話なんて馬鹿げているという思いをもちつつ、気になって行ってみました。ところがその会場に入ると、プロジェクトマッピング(映像)を用い、そのマインダーという観音様が説く『般若心経』の「空」の教えは大変わかりやすく、多くの人が引き込まれていく感じを持ちました。物珍しさかも知れませんが、若い人たちもいらつしやいました。確かに一つの入り口としては、こういう切り口もあるのかと思いを改めて、マインダーに手を合わせたことです。マインダー観音が言います、「仏は何にでも姿を変え人を導く。この度はアンドロイドに姿を変えた」と。木像や絵像に手をあわせるのと同じだと言います。批判的な感覚で高台寺の執事長の記事を見ましたが、古いのは私の方でした。私たちが僧侶が伝えていくことが第一ですが、色々な方策も必要です。大切な事は、お経の意味が少しでも伝わることで、それによって葬儀、法要が意味あるものとなります。是非御法座にお参り下さい。

お念仏のしずく

「お念ぶつをうけいんじん」



私たちが浄土を願うということとは、また私たちがこの現実の私自身の世界と人生について、そのまことの姿をどれ程きびしく思い知り、それを厭い(いと)つけて生きるか、と言うことでもありましょう。親鸞聖人はまことの信心の道とは、ひとえに「世を厭い」「身を厭う」て生きてゆくことであると教えられています。この現実の私の世界と人生は、どこまでも私自身の責任において営んでゆかなくてはなりません。またそれゆえにこそ、その「世」とその「身」について、それが全て末とおらないものであるということ、

慕われ、願われてくることとなりましょう。親鸞聖人が「世を厭い」「身を厭う」て生きよと教えられた意味がここにあるわけですね。

私は今、真宗における念仏の道を学ぶについて、さきに見た『今昔物語』が伝えている源大夫の話の思い出です。

「アミダ仏よお、おいおい」とただひたすらに仏を呼び、浄土を願いつつ、そしてまた、現実の自分の世界と人生をきびしく厭いながら、ひとすじに西へ、西へと歩き続け、ついにアミダ仏の声を聞くことができたという源大夫は、私たち現代の真宗念仏者のあるべき姿を、極めて象徴的に明かしているように思うことでもあります。

『この道をゆく』

安楽寺法要案内

六月	永代経	日時 6月15日(土) 昼席のみ 16日(日) 朝席・昼席 講師 佐賀 圓光寺 五十嵐 雄道 先生 講題 生死出づべき道 ～生と死は本当に 反対のことなのでしょうか～
七月	安居会	日時 7月13日(土) 朝席10:00～ 昼席13:00～ 講師 長崎 浄福寺 本庄 鉄然 先生 講題 念仏者の生活
八月	歓喜会	日時 8月13日(火)・14日(水) 両日とも10:00～11:00 講師 住職自勤 講題 先祖を訪ねる
九月	聴石忌・彼岸会	日時 9月21日(土) 朝席10:00～ 昼席13:00～ 講師 北海道 光心寺 桃井 信之 先生 講題 真宗の眼目

暮らの中の仏教語

『韋駄天走り』
ものすごいスピードで走ることの意。
今年のNHKの大河ドラマ「いだてん」で存じの方も多いことと思います。韋駄天は釈尊に仕えていたという仏法の守護神で、その足の速さは想像を絶するものだと いわれます。こ

ういう伝説があります。釈尊が入滅された時、その遺骨を入手しようと国中から大勢の人が集まりましたが、中に足疾鬼(あしひびき)というのがいて、大切な仏舍利を奪って逃げました。韋駄天はそれを追いかけて、足疾鬼が八万四千由旬もある須弥山の頂上ま



で逃げたのを、一瞬のうちに駆け登って仏舍利を取り戻したというお話があります。その早さとは光速以上の早さになりますから、大変な早さだったと説きます。誇張的表現ですが、これも仏教のお話が始まりです。